

オランダの大学図書館事情

附属図書館情報サービス課相互利用掛長 鈴木 敬 二

1. はじめに

文部省短期在外研究員として、3ヶ月にわたってオランダとイギリスに滞在して、ヨーロッパにおける電子図書館活動の調査・研究をする機会を得ました。本報告では、日本ではあまり馴染みのないオランダの大学図書館事情について紹介します。

2. オランダの高等教育機関と図書館

オランダには国立・私立合わせて13の大学と上級職業学校(Hogescholen)と呼ばれる機関が59あります。学生数は、2対3の割合で後者が多く、合わせると人口換算で日本とほぼ同程度の数となります。両者はいずれも大学レベルの教育が行なわれていますが、大学はより幅広い視野で学問を修めることが目的であり、上級職業学校ではより実務に即した教育が行なわれているという違いがあります。ちなみに、図書館員の養成は、上級職業学校で行なわれており、全国に6校あります。

図書館についてみると、蔵書総数は大学の約1,600万冊に対して上級職業学校が300万冊、購入雑誌数では150,000タイトルの大学に対してと上級職業学校では32,000タイトルと大きな差があり、学術図書館としては大学図書館が中核的な存在となっています。学術図書館としては、別に200万冊、15,000タイトルを擁する国立図書館があります。工科大学や農科大学の図書館では、研究者や学生へのサービスを行なう他、その分野の国家的情報センターとしての役割も

果たしています。

3. 大学図書館の特徴

オランダの大学図書館の特徴を、筆者がお世話になったライデン大学の例を交じえて、いくつか紹介します。

3.1 構成

まず、図書館は中央館と複数の部局図書館から構成されているのが特徴です。訪問した8大学のうち図書館が中央館1館のみであったのはティルブルグ大学だけでした。また、歴史のある古い大学では、大学の施設が一つのキャンパスを形成せず、街中に散在しているケースが多いようでした。



ライデン大学図書館

ライデン大学は1575年創立のオランダ最古の大学で、現在では神学部、法学部、医学部、数学及び自然科学部、芸術学部、社会科学部、哲学部、考古学部の8学部を擁する

総合大学で、学生数はおよそ15,000人です。大学はライデン駅に隣接していて、線路を挟んで西側には附属病院、医学部、社会科学部、自然科学部などがあり、東側にはその他の学部の建物が散在しています。図書館は、東地区の運河沿いにある中央館と4つの部局図書館、複数の学科・研究所図書室で構成されています。全合わせて270万の図書と180万冊の製本雑誌を所蔵し、15,000タイトルの雑誌を受け入れています。

3.2 閉架式

次の特徴は、どの大学図書館もほとんどの資

料が閉架式であることです。ライデン大学中央図書館でも、閲覧室に備えつけられた参考図書や基本図書及び新着雑誌(これらは貸出が不可)を除き、90%以上の資料が閉架式です。地下の書庫には出納専門の職員がいて、利用者はいっさい入れません。そのため、以下のような特徴が見られます。

(1) 資料の依頼から貸出までのシステム化

利用者は資料の依頼をOPACから行います。カウンターで請求することもできますが、この場合も職員がOPACを引いて依頼をしていました。依頼された情報は地下の数ヶ所に設けられたプリントステーションのうち、一番排架先に近いステーションに自動的に出力され、出納専門職員により書架から取り出され、自動搬送機によりカウンターに搬送されます。利用者は依頼から30分後にカウンターに出向くと資料が届いているというシステムになっています。

(2) 書架の効率的な利用

利用者によるブラウジングがないため、開架式のように分野別に並べる必要がありません。ライデン大学では、図書の場合、まず大きさで大中小の3区分をした後、区分内は、受入順に並べていました。当然、書架の途中の増加分を考慮する必要がないため、書架スペースを最大限に使うことができます。また、請求記号は、「書架番号+棚番号+棚内の位置」からなり、配架場所が機械的にわかるので、迅速な出納が可能になっています。

(3) 詳細な分類目録

ライデン大学では6分冊からなる詳細な独自分類表を用いて、分類目録を作成しています。これにより、ブラウジング機能がない閉架式の資料に、主題からのアプローチができるようになっていきます。

3.3 相互利用と一般公開

3番目の特徴は、図書館間の相互利用及び一般市民への公開が進んでいることです。大学の構成員なら、自分の所属する大学図書館だけでなく、どの大学の図書館でも利用証を無料で作成することができ、閲覧はもちろん貸出も可能です。一般市民にも広く公開されていて、閲覧だけでなく無料で、貸出や学習用コンピュータの利用も利用料を払うことにより可能としている大学が多いようです。ライデン大学の場合は、貸出を受けるためには30ギルダー(約1,500円程度)の年間利用料が必要ですが、館内利用は全く自由で、閉架の資料を請求するための利用証は無料で入手することができます。もっとも、オランダでは公共図書館が非常に発達しているので、一般市民は公共図書館を利用することが多いためか、大学図書館の利用はそれほど多くはないようでした。

3.4 組織

図書館の組織上の特徴としては、(1)図書館長が図書館員であること、(2)各専門分野毎にレファレンスライブラリアンが存在すること、(3)特殊コレクションの担当者は教育・研究にもたずさわるなど、図書館員のステータスが高いことが、まずあげられます。また、国立大学でも図書館員の採用は、ポストに対して行なわれるため、日本のような人事異動がありません。ライデン大学だけかもしれませんが、目録関係が書誌作成、分類・件名付与及び目録チェックと3つの係で行なわれており、めずらしく思いました。また、言語毎に専門家が採用されていることがうやましく思いました。

4. オランダにおける電子図書館活動

オランダの電子図書館活動で特徴的なことは、全国レベルの所在目録が存在し、それを利用したILLシステムが整備されていることです。そして素晴らしいことに、全ての大学で遡及入力がほぼ完了しており、ILLシステムには会計処理が組み込まれています。

所在目録を作成する書誌ユーティリティはPicaにより提供されています。Picaは1969年に5つの大学図書館と国立図書館が目録の機械化のためにコンソーシアムを組んだことに始まり、現在では非営利の私企業となっています。Picaは日本の学術情報センターより6年早く、1979年にオンライン分担方式による目録作成システムのサービスを提供し、総合目録の構築を開始しました。現在では、全ての大学図書館を含む400以上の図書館が参加し、総合目録の登録件数は図書が約1,000万書誌と雑誌が35万タイトルとなっています。

大学図書館においては10年程前から遡及入力が始まり、現在ではほとんどの大学で完了しています。ライデン大学では、1983年に「A-Z project」と呼ぶ10名体制のプロジェクトを立ちあげ、約270万冊の図書の遡及が1999年中にほぼ終了するとのことでした。プロジェクトの推進経費の70%は国から通常経費とは別に支給されたそうですが、その目的は学術情報の流通の促進と共に、雇用の創設という側面も大きかったとのこと。ライデン大学では、まったくの図書館素人を採用し2ヶ月間の教育試用期間を経て、適性が認められた者を本採用して入力にあたったとのこと。

ILLシステムの特徴は、依頼先がシステムで自動的に割り振られることと、各図書館で1日の処理件数の上限を設定できることがあげられます。また、利用者には所属する図書館で利用料金を預託することによりILL依頼用のアカウントが発行されます。このアカウントにより、OPACやPicaが提供する各種データベースから利用者が直接ILLの依頼をすることが可能です。しかも、複写された文献は図書館を通さず直接自宅に送付されますので、利用者にとっても図

書館員にとっても非常に便利なシステムと言えます。なお、職員が操作するシステムとは異なり、依頼先を指定することが可能です。さらに、あらかじめ所蔵先の図書館の平均処理時間が表示され、依頼館選択の参考にすることができるなど、きめの細かいシテムとなっています。利用料金は預託金から自動的に引き落とされ、不足の場合は依頼ができない仕組みになっています。もちろん、利用者はいつでも何回でも追加の預託金を預けることができます。図書館間の料金決裁は、4半期毎に相殺処理により行なわれています。

このシステムにより、利用者は既存の紙媒体の資料は全てOPACで検索することができ、



デルフト工科大学図書館

ILL依頼により複写物を迅速に入手することが可能となっています。その上で、CD-ROMや電子ジャーナルなどの電子的な資料についても、全ての大学図書館で大規模に導入され、利用に供されています。現在は、これらの紙媒体や多様な電子媒

体の資料を統一的なインターフェースで簡単に利用できるようにシステムが検討されており、PicaによるPiCartaなど一部実用段階に入ったシステムが登場してきています。

5. 最後に

オランダの大学ではほとんどの図書館に喫茶室がありました。オランダ人はコーヒーが大好きで、一日に何杯も飲むのですが、職場には給湯室のようなものはなく、喫茶室に行っては飲んでいました。特に、10時と3時の休憩には皆が集まり、コミュニケーションの場として利用されていました。もちろん、利用者也飲食や友人との会話の場として大いに利用します。このような場があるため、館内ではほとんど飲食は見られず、また話し声も聞こえず、静かで落ち

着いた図書館の雰囲気が残っていました。京都大学附属図書館にもぜひ欲しい施設の一つだと思います。

最後に、3ヶ月間留守をしてご迷惑をおかけした情報サービス課の皆さんに、また、在外研

究員実現のためにご尽力いただいた関係者の皆さんに深く感謝いたします。ありがとうございました。

(すずき けいじ)

「英国図書館の未来とイギリスにおける大学図書館の発展」

リチャード・ローマン氏講演要旨

はじめに

1999年5月21日、英国図書館(The British Library)のリチャード・ローマン氏(Mr. Richard Roman)による講演「英国図書館の未来とイギリスにおける大学図書館の発展」が行われた。これは、1999年度第1回近畿地区国立大学図書館協議会講演会のひとつとして行われたもので、本稿はその要旨である。

1. 英国図書館の役割

英国図書館はイギリスの国立図書館であり、ふたつの基本的な役割を担っている。ひとつは、他の伝統的な図書館と同じように、閲覧室を通じてすべての資料にアクセスできるようにする役割である。そしてもうひとつは、地理的に遠く離れた利用者へも英国図書館のコレクションを提供するという役割である。英国図書館では、前者をダイレクト・サービス、後者をリモート・サービスとして、明確に位置付けている。

2. ダイレクト・サービス

1997年11月、ロンドンのセント・パンクラスに、英国図書館新館が開館された。新館の完成により、15箇所 に点在していた英国図書館のコレクションを、1箇所 にまとめることができ、

利用者へのより快適な環境を提供している。大英博物館から引き継がれた遺産から、特許、最新科学技術論文など幅広い資料を、機能的に一括して収蔵することにより、求められる資料をより早く提供し、より充実したレファレンス・サービスを行えるようになった。この新館設立により、ダイレクト・サービスの更なる向上が期待されている。

3. リモート・サービス

英国図書館のもうひとつの基本的役割であるリモート・サービスは、地理的に遠く離れたところへ英国図書館の資料を提供することをその第一の目的としているが、このサービスは、「ドキュメント・デリバリ・サービス」と「資料のデジタル化」を中心に成り立っている。

A ドキュメント・デリバリ・サービス

英国図書館におけるドキュメント・デリバリ・サービスは、30年にわたってイギリスの図書館協力や文献提供の基礎となり、今や世界中に文献を提供するまでに至っている。現在、世界各国から月に2万件以上の文献複写のリクエストを受け付けており、日本からも約1000機関が、日常的に英国図書館のドキュメント・デリ